

カシュガル・ホージャ家 アーファーク統の活動の一端

——ヤーリング・コレクション Prov.219 について——

新 免 康
菅 原 純

は じ め に

- 1 本寫本の基本構成
 - 2 第3部分(C)『ハーン・ホージャムのタズキラ』の内容と特徴
 - (1) 構 成
 - (2) 著 作 年・著 者
 - (3) 他史料の敘述との比較
 - (4) 敘 述 の 傾 向 性
 - (5) 史料としての特徴
 - 3 寫本全體の性格について
- お わ り に

は じ め に

トルコ系ムスリムの手になるチャガタイ語等トルコ系言語の寫本（マニユスクリプト）は、東トルキスタンの歴史・社會・文化を研究する上での最も基本的な材料である。それらは世界的に散在しており、近年その所在のあり方に關する情報がかなり明らかになりつつある。その中で、スウェーデンのルンド大學圖書館に所藏される、いわゆるヤーリング・コレクションは有數の史料群を構成している⁽¹⁾。本報告でとりあげるのは、このコレクション中の Prov.219

(1) 20世紀前半期にカシュガルやヤルカンドで傳道活動を行っていたスウェーデン傳道團のミッションナリたちやグンナ・ヤーリング Gunnar Jarring によってもたらされたチャガタイ語、ベルシア語、アラビア語などの寫本・印刷物からなり、ヤーリングにちなんでヤーリング・コレクションと呼稱される。ヤーリングにより一通り整理され、手書きの目録が作成されており、各文獻には假番號が付されているものの、いまだ正式に登録されているとは言い難い。新免康「スウェーデン所在東トルキスタン關連資料について」『内陸アジア史研究』11號, 1996年; Ekström, Per,

という番號の下に保存されている一寫本である (Lunds Universitetsbiblioteket, Gunnar Jarring Collection, Handskriftsavt, Prov.219.)。

この寫本の特徴に關して、一瞥して看取できるのは以下の點である。第一に、その形狀・外觀の獨自性である。4メートル以上に及ぶ巻き物狀で⁽²⁾、金・銀・朱・黄色で彩色が施されている。すなわち、複數人の前におけるプレゼンテーション用に作成されたものである可能性が考えられる。第二に、印章が多數押されていることから、ドキュメントである可能性が考えられる。第三に、内容面に着目するならば、登場する人名等から一見して、いわゆるカシュガル・ホージャ家、就中アフアーク統 (Āfaqīya) に關わるものであることが窺われる、という3點である。周知のように、カシュガル・ホージャ家は17世紀から19世紀の東トルキスタンの歴史上、政治・宗教面において大きな位置を占めていた⁽³⁾。とくにトルコ系ムスリム住民が主體的な政治的活動を行う場合、必ずと言ってよいほどそれに關與し、一定の役割を果たしてきた。しかし、カシュガル・ホージャ家に關わる一次史料は少ないと言わざるを得ない。とくに文書史料は、管見の及ぶ限りにおいては希であり、かつ從來ほとんど研究が爲されていない。

“A Note on the Jarring Collection of Eastern Turki and other Oriental Manuscripts in Lund University Library”, *TURCICA ET ORIENTALIA: Studies in honour of GUNNAR JARRING on his eightieth birthday 12 October 1987*, Stockholm, 1988, pp. 187-204 を参照。

(2) 當史料のように巻物の形態をとった文獻は東トルキスタンでは稀見である。管見の及ぶ限りでは現在新疆維吾爾自治區社會科學院圖書館 (烏魯木齊) に *Bahr al-nasab* (「系圖の海 (or 大河)」) と題する巻物の體裁をとった文獻が所藏されており (配架番號3113)、内容はやはり白山派ホージャの系圖であるが、當史料にあるようなファトワーやタズキラは記載されていない。菅原純「創出される「ウイグル民族文化」—「ウイグル古典文學」の復興と墓廟の「發見」—」『アジア遊學』第1號, 1999年, pp. 83-84 では「系圖の川」というタイトルで *Bahr al-nasab* について言及している。

(3) カシュガル・ホージャ家には、イスハーク・ワリー *Ishāq Walī* を始祖とする黒山派 (*Ishāqīya*) と、イーシャーニ・カラーン *Īshān-i Kalān* ことムハンマド・アミン *Muḥammad Amīn* を始祖とする白山派 (*Īshānīya*) という2系統があり、とくに黒山派と、白山派の一派であるアフアーク統とは、東トルキスタンにおける政治的主導權をめぐる對立的な關係に立っていた。詳しくは、小松久男編『中央ユーラシア史』, 山川出版社, 2000年, pp. 302-305; 羽田明『中央アジア史研究』, 臨川書店, 1982年, pp. 1-48; 嶋田襄平「アルティ・シャフルの和卓と汗と」『東洋學報』34:1・2・3・4, 1952年, pp. 103-131 を参照。

そこで本報告では、ユニークな相貌をもつ本寫本の全容を紹介し、その史料としての性格について検討することを通して、東トルキスタンの歴史的アスペクトの一断面にアプローチするための材料を提供したいと考える。具体的な手順としては、まず寫本全體の基本的な構成を明らかにし、主要な3つの部分に關する解説を施した上で、それ自體が獨自な著作としてとらえられる第3部分をとりあげ、その史料としての内容と特徴を検討する。最後に、これらを基礎としながら、本寫本の性格づけを試みたい。

1 本寫本の基本構成

本寫本は、10枚の紙を張り合わせた巻き物状で、幅が295mm、長さ4,300mmというサイズをもっている。ヤーリングの作成した手書きの目録によれば、ルンド大學圖書館における東トルキスタン關連コレクション中のドキュメント史料の相當部分は、スウェーデン傳道團⁽⁴⁾のメンバーであったグスタフ・ラケット Gustav Raquette⁽⁵⁾により入手されたものであり、本寫本にも同様の注記がある。したがって、入手地はそのラケットが駐在していたカシュガルあるいはヤルカンドである可能性が高い。しかし、具体的な入手先については不明である。

本寫本の基本的な構成は以下のようになっている。

主體部分は、(A)「ファトワー」、(B)『ハーン・ホージャムの系譜の書 (*Ḥaḍrat Khān Khwājām Pādshāh qadus sarra rūhlari-ning nisbat nāma surriyālari*)』、(C)『ハーン・ホージャムのタズキラ (*Tadhkira-i Khān Khwājām*)』という3つの部分に大別される。第2部分と第3部分については、題目がそれぞれ記されている。本體の周圍に當たる部分には、ヘッダーに當たる箇所(D)に印章が押され、また右脇の部分(E)には「アーヤト (*āyat*: クルアーンの一節)」あるいは「ハディース」と

(4) スウェーデン傳道團の活動については、Hultvall, J., *Mission och revolution i Centralasien. Svenska Missionsförbundets mission i Östturkestan 1892-1938*, Stockholm, 1981. を参照。

(5) ラケットは、東トルキスタンの言語・歴史に造詣が深く、自己が収集した文書の一部を紹介しているほか、歴史に關する解説も残している (*På obanade stigar*, Stockholm, 1917, pp. 43-65)。

(A)ファトワー

- ・ 2-3行ごとと横線で区切られた22のセクションからなる。
- ・ 9つの「ハディース」の引用（アラビア語＋トルコ語）
- ・ 要旨：Muhammadの子孫を無条件に尊重し、これに奉仕することを求める。
- ・ プハーリーの『サヒーフ』等の文獻に依據して書かれたと明記。しかし『サヒーフ』をはじめとする著名なハディース集にはそれに相當するハディースはなし：偽作ハディースか

(B)「ハーン・ホージャムたちの系譜の書」

(1)第一部分

→ 72個の圓の中に人名、詩、アーヤトもしくはハディースと稱せられるものが書かれてある。

1-13：'Alr から Makhdam-i A'zam に至る血統

14,15：Khwaja Hidayat Allah Āfaq

16-20：Satuq Bughra Khanおよびカラハン朝のハーンたち

21-24：Burhan al-Din Khwajaとその関係者

24-29：Burhan al-Din Khwajaを稱える詩→タズキラ部分と對應

29-34：Khwaja Daniyal にいたる Ishāqiya の血統

34-39：Burhan al-Din Khwaja 以降のアーファーク統の血統

40-45：空白

45-55：「アーヤト」

56-72：「ハディース」

・ Makhdam-i A'zam に至る系譜部分は他の史料（*Tadhkira-i 'azizān*, 『欽定西域同文志』等）の記述に一致。

(2)第二部分

大圓：預言者 Muhammad とカリフ、12 イマーム

小圓：預言者 Muhammad とその近親者

周邊：東トルキスタンで著名なイスラーム聖者たち等

→ (a)歴史上のスーフィー、(b)各イスラーム法學派の始祖、(c)12 イマーム、(d)イランの傳説的英雄、(e)カラハン朝の諸王+改宗傳説に登場する聖者等。

⇒ 東トルキスタンにおけるムスリムの精神世界の一端を垣間見せる。

(D)印章

- ・ 寫本のヘッダーの部分、右側の聖句を記した部分、そしてイスラーム聖者の名前を記したセクションの下の部分などに45個押されている。その中には重複するもの（複数回押されたもの）もあり、使用された印章の数は30。
- ・ 一部變則的な押印→押印後に文言が記入される
- ・ 印章に刻まれた人名：同定困難。
- ・ 年號の刻印→本寫本の成立はヒジュラ曆1258年（西曆1842/43年）以降

(E)「アーヤト」と「ハディース」

→ (A)ファトワーと重複する内容。

(C)「ハーン・ホージャム」

- ・ 3-5行ごとと横線で区切られた31のセクションからなる。
- ・ 18世紀中葉に活動した Khan Khwajam こと Burhan al-Din Khwaja (?-1759) の物語。
- ・ 散文・韻文の混合された文體。

圖1. Prov.219 見取り圖

寸法：295mm×4300mm

稱されるものがアラビア語とトルコ語で書かれている。以下に、圖 1 (Prov.219 見取り圖)に基づきつつ、主體的な 3 部分について説明する。

第一部分の(A)ファトワーは 2－3 行ごとに横線で区切られており、その區畫をセクションと呼稱すると 22 のセクションからなっている。そのセクションの區切りと内容の對應性はない。9 つの「ハディース」の引用からなっており、アラビア語、その下にそのトルコ語譯が併記されている。一部を掲げてみよう。

預言者閣下（彼に平安がありますように）は次のように仰せられた、「尊敬せよ、我が敬虔なる子孫たちを。尊敬せよ、我が敬虔なる子孫たちを。彼らを尊敬せよ、神 (khuda-yi ta'ala) のために。私の無知蒙昧なる子孫たちを尊敬せよ、私のために、そして私に對する尊敬のために」と。⁽⁶⁾

預言者閣下（彼に平安がありますように）は次のように仰せられた、「無知なる [ひとりの] 聖裔は 70 人の學者にまさる。いかにその人が淫らな人物であったとしても、聖裔を侮辱・輕蔑しなければ、そしてそうした態度を 40 年保つのであれば、彼の不信仰は消え去る。見よ、[異教徒・不信仰者への] 罰は過酷であり、それから逃れることはできない」と。⁽⁷⁾

當該部分は、ムハンマドの子孫を無條件に尊重し、これに奉仕することを求める、という内容をもっている。

9 つの「ハディース」が掲げられた後の記載として、この「ファトワー」がブハーリー Bukharī の『サヒーフ *Ṣaḥīḥ*』等に基づいて書かれたと記されている。しかし、少なくともブハーリーのハディース集にはこれらに該当するものは見いだせない⁽⁸⁾。また、いくつかの著名なハディース集にも見あたらず⁽⁹⁾、偽作であるという疑いを拭いきれない。

第 2 部分の(B)『ハーン・ホージャムの系譜の書』は、形態面からも内容面からも、(1)前半部の同一サイズの圓が並んだ中に人名等が書かれている部分と、

(6) Prov.219, A のセクション 7-8。

(7) Prov.219, B(1)の圓 10-11。

(8) 牧野信也譯『ハディース ―イスラーム傳承集成』全 3 卷，中央公論社，1993-94 年。

(9) 例えば磯崎定基（他）譯『日譯サヒーフムスリム』全 3 卷，日本サウディアラビア協會，1987 年 など。

(2)大圓・小圓およびその周囲のおびたしい数の人名部分、という二つに分けて考えることができる。

(1)前半部には、72個の圓の中に人名、詩、アーヤト、ハディースと稱せられるものが書かれている。その構成は以下になっている。なお、圓の番号は右上の圓を1とし、以下左に2, 3, 4, 次に1の下の圓を5とし、左に6, 7, 8, 以下同様に72まで番号をふることにする。

1-13: アリー ‘Alī からマフドゥーミ・アーザム Makhdūm-i A’ẓam に
至る血統

14,15: ホージャ・ヒダーヤト・アッラー・アーファーク Khwāja
Hidayat Allah Āfaq

16-20: サトゥーク・ブグラ・ハーン Satūq Bughrā Khān らカラハン
朝のハーンたち

21-24: ブルハーン・アッディーン・ホージャ Burhān al-Dīn Khwāja
(=Khan Khwāja) とその関係者

24-29: ブルハーン・アッディーン・ホージャを稱える詩

29-34: ホージャ・ダーニヤール Khwāja Daniyāl にいたる黒山派の血統

34-39: ブルハーン・アッディーン・ホージャ以降のアーファーク統の血
統

40-45: 空白

45-55: 「アーヤト」

56-72: 「ハディース」

最初のマフドゥーミ・アーザムへと繋がる系譜の部分は、他の関連史料、たとえば『タズキラ・イ・アズイーザン (Muḥammad Ṣādiq Kashgharī, *Tadhkira-i ‘azīzān.*)』¹⁰⁾などにおける記述と一致している。

第2部分の(2)後半部には、預言者ムハンマドと、正統カリフおよび12イマームのうちの一部の名前が書かれた大圓、その下に預言者ムハンマドとその近親

(10) 本稿では、主に Bodleian Library, Ms.Turk, D.20 寫本を用いる。歴史文獻としての當史料の性格については澤田稔『『タズキラ・イ・ホージャガーン』研究についての覺書』、『帝塚山學院短期大學研究年報』39號, 1991年, pp. 1-15 参照。

者たちの名が書かれた小圓があり、この二つの圓を取り圍むように、歴史上のスーフイー、各イスラーム法學派の始祖、12イマーム、イランの傳説的英雄、カラハン朝の諸王とその改宗傳説に登場する聖者など、東トルキスタンにおいて著名な存在であることがわかっているイスラーム聖者たちを中心に、多数の人名が列擧されている。この部分からは、當時の東トルキスタンにおけるムスリムの精神世界の一端を垣間見ることができるのではないと思われる。

第3部分として、(C)『ハーン・ホージャムのタズキラ』が配置されている。この部分は圖1にもあるように、3～5行ごとに横線によって區切られている。その3～5行ごとの區畫をセクションと呼稱すると、31のセクションからなっている。セクションの區分と内容における區分との對應性はない。内容的には、18世紀中葉に活動したカシュガル・ホージャ家アーファーク統のホージャであるブルハーン・アッディーン・ホージャ Burhan al-Dīn Khwaja の生涯が、散文・韻文の混合された文體で敘述されている。このタズキラについては次章で検討する。

以上が本體部分である。

本體の外にある部分については、まず本體部分の右側に「アーヤト」と「ハディース」と稱される文言が記されている。當該部分の一番末尾に記された部分には、

預言者閣下（彼に平安がありますように）は次のように仰せられた、「尊敬せよ、私の子孫たちを。私の子孫はまことに偉大である。もし彼（＝聖裔）が敬虔かつ幸福であれば、彼らを尊敬せよ、私のために。たとえ彼が淫蕩者であっても、やはり彼らを尊敬せよ、私のために、私に對する尊敬のために！」と。⁽¹¹⁾

とあり、この敘述からもわかるように、ムハンマドの子孫は偉大であるから尊重せよという端的な主張が繰り返されている。すなわち、第1部分の「ファトワー」と重複する内容をもっていると言える。

残る印章については、寫本のヘッダーの部分(D)、右側の部分(E)、そしてイスラーム聖者の名前を記した第二部分(B)の最下部などに、總計45個押されている。

(11) Prov.219, E.

その中には重複するものが含まれており、使用されている印章の数は30である。印章に刻まれた人名は、残念ながらいずれも他史料を参照しても同定できない人名ばかりである。他方、一部の印章に年號の刻まれているものが見られ、一つは1243年(西暦1827/28年)、いま一つは1258年(西暦1842/43年)と読むことができる。したがって、本寫本はヒジュラ暦1258年以降に作成されたと考えられる。

2 第3部分(C)『ハーン・ホージャムのタズキラ』の内容と特徴

このタズキラにおいて敘述対象となっている「ハーン・ホージャム(我がハーン・ホージャ)」というのは、18世紀中葉に活動したカシュガル・ホージャ家アーファーク統のホージャ、ブルハーン・アッディーン・ホージャ Burhan al-Dīn Khwāja を指している。この人物は、まず、ジュンガル勢力による幽囚状態から解放された後、ジュンガル勢力の管理下においてヤルカンドを中心に政權を維持していたイスハーク統のホージャたちと戦闘を行ってその勢力を一掃し、權力を掌握した。しかし、その後、ジュンガル勢力を滅ぼしてこの地域へと進出してきた清朝と對立し、到來した清朝軍勢力に對して抵抗したものの、結局抗しきれずにバダフシャンに逃走して死亡したことで知られる¹²⁾。すなわち、清朝による東トルキスタンの征服という重大な歴史的事件の中で、ムスリム勢力側の主要な當事者として重要な役割を果たした人物であると言える。

本章では、このタズキラを獨立した一つの史料としてとらえ、その構成、史料としての信憑性、内容の傾向について検討した上で、史料としての性格を明らかにしよう試みたい。

(1) 構成

本タズキラの基本的な構成は、時間的な経過に従ってブルハーン・アッディーン・ホージャの活動・事績を敘述するというスタイルをとっている。大き

¹²⁾ 詳しくは、Ходжаев, А., *Цинская Империя и Восточный Туркестан в XVIII в.*, Ташкент: ФАН, 1991, с.66-97; 佐口透『十八—十九世紀東トルキスタン社會史研究』, 吉川弘文館, 1963年, pp. 39-80 を参照。

く分けると、以下のような6部分から構成されると考えられる。

S.1-5 アダム Ādam, ムハンマド Muḥammad にはじまり、マフドゥーミ・アーザム～白山派ホージャの聖者に對する賛辭。

S.6-19 ジュンガルに幽囚されていたブルハーン・アッディーン・ホージャがイリ(原文 Ila)をでてヤルカンドに行き、のち清朝軍と戦闘の末、バダフシャンに至りその地で殺害されるまで、時間経過に沿う形での敘述。

S.19-21 ブルハーン・アッディーン・ホージャへの非難に對する反駁

S.21-24 殉教者(アリー・ホージャム 'Alī Khwajam, アブドゥル・カリーム 'Abd al-Karīm, ブルハーン・アッディーン・ホージャ, トゥーラク Tulak)たちへの回想

S.25-29 バダフシャン人に對する嫌惡感の表明

S.30-31 ブルハーン・アッディーン・ホージャの埋葬地についての敘述～マフドゥーミ・アーザムの子孫中の王の數など

(2) 著作年・著者

當該タズキラをある程度の獨立性を有する一つの著作としてとらえるとして、その著作年は記されていない。セクション5に、ブルハーン・アッディーン・ホージャの弟であるホージャ・ジャハーン Khwaja Jahān の孫で、1826年から27年に亡命先のコーカンド・ハーン國領から清朝領のカシュガル方面に侵入したジャハーンギール・ホージャ Jahāngīr Khwaja が、殉教者として登場する記載が見られる。したがって、本タズキラ部分の成立年は1828年以降であろうと思われる。

このタズキラの著者は特定できないが、以下のように、ブルハーン・アッディーン・ホージャについて物語ったとされるユースフ Yūsuf という人物への言及がある。

さて、歴史は Yūsuf という者も任命する。聖裔 Khān Khwajam を物語った、大學者 Yūsuf という者は。私たちは Khwajam の魂からよい知らせを受け取った。さて、歴史は大學者 Yūsuf という者を任命した。⁽¹³⁾

(13) Prov.219, C のセクション19。

おそらくはこのユースフと言う人物が、著者ないしは情報提供者である可能性がある。また、この部分の後に、

Balkh, Baghdad, Bukhārā, Rūm, Shām, Isfahān, 果ては Thamarqand, Khojand, Andrijan, そして Marghilān, Hindustān の諸市, Kabul, Shām と「世界の町」こと Khārizm (=Khorezm) の町, Īrān, Miṣr 及び Hamadān で書かれた宗教書から私は44の書を學んだ。賢者たちの手になる30書を私は詩 (naẓm) に作った。老いることは私の幸福である。私は賽を振って賭けを爲した。¹⁴

とあり、第1人称で自分が學識をもつことを誇示するこの部分も、著者自身に關する敘述である可能性がある。しかし、この著者を特定の歴史的な文脈の中に位置づけることはできない。

(3) 他史料の敘述との比較

次に、ブルハーン・アッディーン・ホージャの活動の経緯についての敘述において、それが他の史料から窺われる事實關係とどの程度對應しているのか、という点について検討してみる。

まず、立場はまったく異なるものの、同時期の状況、諸事件について詳細な敘述をもつ清朝史料に着目する。『欽定平定準噶爾方略』における諸事件の記事を時系列に沿って並べ、それと本タズキラの該当部分とを對應させたのが、下記の表である。

表 『欽定平定準噶爾方略』と Prov.219 との記事對照表

中國曆 (乾隆)	西 曆	『欽定平定準噶爾方略』記事	卷	葉	Prov.219(C) 對應部分
20.4.8	1755.5.18	清軍、ホージャ兄弟を解放	10	35r-36r	セクション 6-7
		班第(定北將軍)、阿ト都伯克('Abd Wab)の建言に基づきホージャ兄弟をカシュガル、ヤルカンド勢力に對抗するため派遣することを決定・報告。	14	37r	

¹⁴ Prov.219, C のセクション25。

22.3.	1757.4-5	ホージャ兄弟の「反亂」、クチャにて勃發。副都統阿敏道らを殺害す。	39	27r-28r	
23.4.16-7	1758.5.23-4	清軍カラ・シャフルに到達。	55	07r-08v	セクション 10
23.6.18	1758.7.22	サイラムのベグ阿瓜斯伯凱(Awāz Beg?), ホジャ側のベグ阿里('Alī)を捕え清軍側に投降を表明。	58	20r-v	
23.8.6	1758.9.7	クチャ降伏。阿ト都克勒木('Abd al-Karīm)は逃亡。舊伯クの阿濟('Azīz?)は清軍に阿ト都克勒木の妻子を獻ず。ほか、捕虜多数。	60	23r-26v	セクション 11-12
23.8.20	1758.9.21	アクスの頭目毛拉阿噶爾(Mulla Āshūr)ら投降を申し出る。	61	23v-24r	
23.8.29	1758.9.30	ウシュ、清軍に歸順。霍集斯伯克(Khwāja Sī[r] Beg), 子の呼岱巴爾噶(Khuda Berdī)を派遣し清軍に歸順を表明。	62	11r-13v	
23.10.13	1758.11.13	靖逆將軍納穆扎爾, ヤルカンド攻略戦の中戦死。	65	1r-3r	
23.10.13	1758.11.13	通古斯魯克(Tūnguzlūq)の會戦(1/8まで)「賊20000」vs「清軍1000」。	68	12r-v	セクション 12-14
23.11.5	1758.12.05	ホタン、清軍に歸順。	65	15r-17r	
23.11.26	1758.12.26	ヤルカンドの賊鄂斯噶('Othman), 塞爾爾(Sabūr)など賊600餘, 哈喇哈什(Qara Qash)―額里齊(İlīchī)間に出没・交戦。	67	20v-21r	
23.12.3	1759.1.1	(清軍の到來を受けて)布羅泥都(Burhān al-Dīn)はカシュガルより歩兵5000人とともにヤルカンド支援に到來。霍集占(Khwāja Jahan)の軍と合流し, 清軍と交戦。30餘日清軍を包圍。	66	20v-22v	
23.12.4	1759.1.2	舒赫德, アクスより3500の兵を率い巴爾楚克(Barchūq)に到達。	68	7v	
24.1.6-10	1759.2.3	清軍, 呼爾滿にて賊と交戦。布羅泥都は負傷, カシュガルに歸還。	68	8r-12r	
24.6.2	1759.6.26	霍集占, ヤルカンド脱出。	75	21v-22r	
	1759.7	阿ト都伯克, 布羅泥都の命令でウシュに「逃往」。	74	31v-32r	
24.6.27	1759.7.21	布羅泥都, カシュガル脱出。	74	26r	
24.7.28.	1759.8.20.	ホージャ兄弟, バダフシャン到達。(→素坦沙(Sultān Shah)の命令により數日後殺害さる。)	79	17v-19r	セクション 17-19

これに基づくならば、『欽定平定準噶爾方略』から得られる事実関係の経過と、タズキラにおける各事件の経過の敘述は、諸事件の時系列における順序において相互に矛盾がない。

また、このような対応性は、重要事件の内容面における敘述についても見てとることができる。当該タズキラでは、異教徒である清朝との戦いの中でとくに印象的な事件として取り上げられているトゥーングズルーク (Tunguzluq)¹¹⁵の戦いに関して、具体的な戦術にまつわる情報が含まれている。すなわち、

Qarayulghun の平原で異教徒を撃破した、Khan Khwajam は。93日間戦闘をおこない、Tunguzluq で宿營した、Khan Khwajam は。Bay Nazar の園で砦を築いた、Khan Khwajam は。その周囲に濠 (khandak [sic.]) を掘り異教徒を水攻めにした、Khan Khwajam は。Chin khaqan (チーンのハーカーン)¹¹⁶の軍隊を威壓するならば、よいであろう！6000人の異教徒を率いて來た、Nar Changchun Khatay が¹¹⁷。600人の異教徒とともに來た、さらに Shur Ghalday Khan が。[Khwajam は] 言った、「この矢筒より矢を取れ、私は撃とう」と。Ghalday の生首を Chahar Su に吊るすならば、よいであろう！¹¹⁷

とあり、ここでブルハーン・アッディーン・ホージャラムスリム勢力側は、要塞を構築し、壕を掘り、清朝軍を水攻めにしたことがわかる。このトングズルクの戦いは、清朝側にとっても重要な事件の一つであったらしく、清朝史料において一定のスペースを割いて敘述されている。『欽定平定準噶爾方略』には、
昨年 (=乾隆23年) 10月13日、兵を率いて通古斯魯克 (Tunguzluq) に至り、そこで騎馬および徒歩の賊軍20000餘人と遭遇した。私たち清朝軍は1000餘人であり、河を渡った者は僅かに500餘名であった。奮戦したものの馬が疲弊したため、賊軍に前を遮られ包圍された。そこで立て籠もって

(115) Stein, Sir Aurel, *Innermost Asia : detailed report of explorations in Central Asia, Kansu, and Eastern Iran carried out and described under the orders of H.M. Indian Government*, (reprint) New Delhi, 1981 の Map (YARKAND: Sheet No.11, 4-B) に Tonguzluk という地名が見られる。

(116) 清朝皇帝を指すものと考えられる。

(117) Prov.219, C のセクション13-14。

防御した。賊軍は今度は濠を掘って立ち塞がり、双方譲らなかった。このまま3ヶ月が経過し、その間に晝夜戦闘を行った。賊軍は初め私たちの軍營を水攻めにしたが、これに對し私たちはただちに濠を掘って排水した。葦で身を隠しながら侵入してくる敵に對しては、火を用いて焼いた。また溝を掘って身を伏せて前進してくる敵に對しては、高いところから攻撃して撃退した。本年正月8日、北面に銃聲を聞き、援軍が到來したと考え、夜陰に乘じ即座に兵1000餘名を選び、攻城用の高梯子を用意し、兩面から攻撃した。私たちは賊の軍營を焼き討ち、1000餘人を殺傷し、50餘人を生け捕りにし、多くの軍旗・兵器を獲得した。¹⁸

とあり、ブルハーン・アッディーン・ホージャらが濠を掘って對抗し、清軍に水攻めを行ったという點に關して、タズキラの敘述と合致している。また銅版畫『乾隆帝準回兩部平定得勝圖』においては、この戦闘の描寫に一葉が割かれている（圖2參照）。¹⁹

他史料との對照においてもうひとつ注目される點は、ブルハーン・アッディーン・ホージャに従ったベグやアホンとして當タズキラに登場する人物名のかなりの部分が、やはり清朝史料や、『タズキラ・イ・アズイーザーン』に見られる人物名と合致するということである。とくに、Prov.219 にアブド・ワーブ ‘Abd Wab という名で現れる人物については、その事績も含めた對應性を見いだせる。Prov.219 寫本においてアブド・ワーブは、重要な場面で3回登場する。一つは、ブルハーン・アッディーン・ホージャがイリからカシュガル及びヤルカンド方面に向かって出發する際の敘述として、

[Khan Khwajam は] Zība とお出になった、Īla という地を。‘Abd Wab が来て言った、「私の命である Khwajam よ、イスラームを爲して下さい、おお私の信仰の光よ」と。Khwajam が到る所でイスラームを爲し、Yarkand に向かわれるならば、よいであろう²⁰

とあるほか、清軍が到來した際の状況として、

¹⁸ 『欽定平定準噶爾方略正編』、卷68, pp. 12r-13r.

¹⁹ 『乾隆帝準回兩部平定得勝圖』、東洋文庫所藏 (III/9-B/869), fol.18 (「通古思魯克之戰」)

²⁰ Prov.219, C のセクション6-7。



圖2 『乾隆帝準回兩部平定得勝圖』に描かれた「通古思魯克(Tūngūzlūq)の戦い」
(東洋文庫所蔵)

lashkar-i Chīn (チーンの軍隊) が来て、Yarkand を包圍した。ホージャムは我々を保護し、力づけた。‘Abd Wab が心配そうにその場にやって来て申し上げた、「ああ、ホージャム様。異教徒を殺すことは報われる価値のあるよい仕事です。もし我々が Chīn khāqān (チーンのハーカーン) の軍隊に猛威を示すならば、それはよいことでしょう」と。⁽²¹⁾

とあり、ホージャに親しく助言を與える重要な立場の人間として描寫されている。また、ホージャが清軍との戦闘で敗北した際の記述として、

Khwan [sic.] Khwajam は退いた、Bugūr から、Taghlīq ‘Othmān Beg とともに。Khwāja ‘Azīz より手紙が来た、かの Mu‘zaffar [sic.] Beg とともに。‘Abd Wab Beg は嘆いて言った、「私は死ぬ、私の信仰とともに。私は私の信仰を違えることはない、私の信仰の強さとともに」と。Khān Khwajam のような人を最後の審判で見ると、よいであろう!⁽²²⁾

とあり、ホージャに對する厚い信仰心に基づく態度が強調されている。このように、本タズキラにおいて、ブルハーン・アッディーン・ホージャに對して忠

(21) Prov.219, C のセクション10。

(22) Prov.219, C のセクション11。

實な、いわば側近的な存在として、アブド・ワーブに重要な役回りが與えられていることは間違いない。

他史料においても、Prov.219 寫本に登場するアブド・ワーブと同一人と思われる人物が、當時の事態の展開に直接關與した、ブルハーン・アッディーン・ホージャ寄りの有力者として、しばしば言及されている。たとえば、『欽定平定準噶爾方略』によれば、定北將軍班第の奏として、清朝によるジュンガルの撃滅後、アブド・ベグ（阿都伯克）と呼ばれるアクスのハーキム（知事）が、清朝に對し、黒山派ホージャたちの支配下にあるカシュガルとヤルカンドの勢力に對抗させるために、白山派のブルハーン・アッディーン・ホージャ（波羅泥都）とその弟のホージャ・ジャハーン（霍集占）を清軍とともに派遣すべきであると、清朝側に助言したという²³が、このアブド・ベグはアブド・ワーブであった可能性が高い。その後、ブルハーン・アッディーン・ホージャらが東トルキスタンにおける統治權をめぐって黒山派ホージャたちと戦いをを行った段階における『タズキラ・イ・アズイーザーン』の記述においては、やはりアクスのハーキムであるアブドゥル・ワッハブ・ベグ ‘Abd al-Wahhāb Beg という人物が、ブルハーン・アッディーン・ホージャの側近として重要な役割を果たしていた人物として敘述されている²⁴。清朝史料によれば、ブルハーン・アッディーン・ホージャによる黒山派ホージャに對する勝利と政權の掌握後、アブド・ワーブ（阿布都瓜ト）はヤルカンドの「ベグ（伯克）」に任命された²⁵が、ブルハーン・アッディーン・ホージャが清軍との戦闘に敗れると、ブルハーン・アッディーン・ホージャの指示によってブルハーン・アッディーン・ホージャから離れ、ウシュに向かったと言われる²⁶。このように、アブド・ワーブがブルハーン・アッディーン・ホージャときわめて親しい関係にあり、ブルハーン・アッディーン・ホージャの活動に關わる事態の推移の各段階において顯著な役割を演じてきたことは確實である。そしてそのことは、Prov.219 寫本の記述と合致すると言えるであろう。

²³ 『欽定平定準噶爾方略』卷14, pp. 37r~38r。

²⁴ Martin Hartmann, *Der Islamische Orient*, Band 1, Berlin, 1905, pp. 259-270。

²⁵ 『欽定平定準噶爾方略』卷61, 27v~28r。

²⁶ 『欽定平定準噶爾方略』卷74, 31r~32r。

このほか、宗教指導者たちについても、同名の人物が見いだされる。たとえば、「まちへ彼らは Sang (<Sang bazar) より来た、Saqaḷ Şufum [sic.], Nuşrat Ākhūnd, Barā't [sic.] Ākhūnd Qul, Mulla Nawrūz, Mulla 'Azīz Ākhūnd, Mulla Qutluḡh Saqaḷ Ākhūnd. 6 人のアホン [すなわち] Yengī Bagh の花たち。[これに對し] 鳴いた, Chahar Bagh のナイチンゲール (bulbul) たちは。」⁶⁷⁾ というアホンに関する記述がある。他方、『タズキラ・イ・アズイーザーン』には、黒山派ホージャたちの使者がブルハーン・アッディーン・ホージャらの陣營を訪ねた際の状況として、

さて、この [黒山派 Khwaja Yūsuf からの] 手紙をもって側近たちは使者となって出發した。そして手紙を届けて Khwaja Sī [Beg] に會見した。Khwaja Sī は使者たちを連れて外に出た。彼らは行って、次のようなものを見た。(そこでは) テントが設営されていた。そしてその兵士たちは, Qalmaq, Ālūd, Khiṭay らが混ざっており、若干いたムスリムたちは、その様子やすべての言葉がまるで異教徒のように見受けられた。

(中略) 彼らは娛樂に興じていた。幕の中心には絨毯の上に Khoja [sic.] Burhān al-Dīn [b.] Khoja [sic.] Aḥmad が座っていた。(中略) [Burhān al-Dīn の左右に座を占めていた] 人々は以下の通りである: Kashghar から邪惡な Muḥammad Īmīn Beg, その息子 'Abd al-Raḥmān Beg, Yūsuf Beg, その兄弟 'Abd Sattār Beg, Mūsā Beg, Khudāyār Beg, その息子 Muḥammad Īmīn Beg. Yarkand から Qārghaltq のハーキム Mirza [sic.] Niyāz Beg, その息子 Mir [sic.] 'Awāḍ Beg, Daulat Khwaja. Āqsū のハーキム 'Abd al-Waḥḥab Beg ('Abd Wab), その弟 'Umar Beg, その息子 'Abd Sattār Beg, 'Abd al-Khālīq Beg. さらに Āqsū のベグたちと Ush のハーキム Khoja [sic.] Sī Beg, その息子 Muḥaffar Beg, [Ush の] イシク・アガである Shārt Beg, Kūchār のハーキム Allāh Qulī Beg, Muḥammad Yār Beg, Sayrām のハーキム, Dolān のハーキム Sa'adat Beg. Īla のベグたちから Raḥmān Qulī Beg, Farmān Qulī Beg, 'Abd Raḥīm Beg, Qırghız 'Abd Allāh Beg.

⁶⁷⁾ Prov.219, C のセクション14-15。

これらのほかにも多くのアミールたちがいた。悪辣なスーフィーたちからは Mündü Şufî, Raḥmatî Şufî, Udür(?) Niyaz Şufî, Nishtir(?) Niyaz Şufî。さらに無知なアホンたちから Mulla 'Awaḍ Ākhünd, Mulla Niyaz Ākhünd, Mulla Qutluḡ Ākhünd, Saqāl Ākhünd, Mulla Barāt Ākhünd, Mulla Qasīm Ākhünd, Mir [sic.] Nawrūz Ghazānachi, Sarīq Yasāwul, Ilyas Ākhünd。これらの他にも無名のスーフィーたちが数多くいた。²⁸⁾

とあり、前述のアブド・ワーブラベグたちのほか、「無知なアホン」たち²⁹⁾がブルハーン・アッディーン・ホージャの側に侍していたとして掲げられている。これらのうち、ムッラー・クトルーグ・アフーンド Mulla Qutluḡ Ākhünd, サカル・アフーンド Saqāl Ākhünd, ムッラー・バラート・アフーンド Mulla Barāt Ākhünd については、前述の Prov.219 寫本における記述に、同様の人名を見いだすことができる。

以上より、事實關係の經過と重要事件の内容、ブルハーン・アッディーン・ホージャの下的有力者に關する記述などにおいて、Prov.219 寫本の第3部分を構成するタズキラは、清朝史料や、立場を異にする他のトルコ系住民側史料の敘述と、部分的に整合性を示している。したがって、本タズキラは、「傳説」というタイトルを冠しているとはいえ、かなりの程度、事實關係に即した内容を具えていると言っても過言ではない。

(4) 敘述の傾向性

このタズキラは、敘述のあり方という點で、どのような特徴を具えているであろうか。

まず、中心的な対象であるブルハーン・アッディーン・ホージャに對する敘述方法という觀點から見ると、とくに強調されている點として、異教徒との對抗ということが指摘できる。たとえば、

²⁸⁾ *Tadhkira-i 'azizān*, ff.104r-v..

²⁹⁾ *Tadhkira-i 'azizān* は、イスハーキーヤに親しい立場から書かれた著作であるため、ブルハーン・アッディーンやその配下の人々に對しては否定的な敘述がなされている。

(1) Khān Khwājām の時代、多くのまちがイスラームを開いた。Yarkand の城砦、それは異教徒に仕掛けられた罠。手中に金の宮殿、脇の下には杯が、Yarkand にはすべてがある。

もし私たちがイスラームの道に入るならば、よいであろう！

(2) lashkar-i Chīn (チーンの軍隊) が来て、Yarkand を包圍した。ホージャムは我々を保護し、力づけた。‘Abd Wab が心配そうにその場にやって来て、申し上げた。「ああ、ホージャム様。異教徒を殺すことは報われる価値のあるよい仕事です。もし我々が Chīn khāqān (チーンのハーカーン) の軍隊に猛威を示すならば、それはよいことでしょう。」

(3) Khān Khwājām に使節として来た、500人の ghalday は。彼らは受け入れられなかった、Khwājāmに。「ghalday を私は撃とう。[そして] Imām Ḥusain 閣下の血をおまえ (=ghalday) から取ろう」と、嘆いた、そして言った、Khān Khwājām は。「我が祖 Ḥusain はどこに？」と、Khān Khwājām はまだら模様の馬 (gul badam at) にまたがり、異教徒を撃った。

(4) Khān Khwājām はおっしゃった、それは命よりも尊いこと。玉言を爲されれば、それは神への感謝よりも尊い。私の王は座っておられる、私たちの前に。その下僕として命を捧げるならば、よいであろう！

とあり³⁰、ムスリムのすぐれた指導者として清朝の軍隊、すなわち異教徒「カーフィル」との戦いを勇敢に遂行した人物として、イスラーム「聖者」たるブルハーン・アッディーン・ホージャを稱揚する、そしてそのホージャに従うことが無条件の至上命題であるということを主張する内容である。

また、このようなホージャ自身に対する稱賛とともに、前述のアブド・ワーブ・ベグや、アブドゥル・カリーム・ベグ ‘Abd al-Karīm Beg など、ホージャに付き従った有力者たちを稱える内容が含まれている。ここでは、殉教したとされるアブドゥル・カリーム・ベグに関する部分を掲げてみよう。

‘Abd al-Karīm Beg 閣下は最高の殉教者となり、

³⁰ (1)Prov.219, C のセクション7; (2)Prov.219, C のセクション10; (3)Prov.219, C のセクション13; (4)Prov.219, C のセクション17。

Khān Khwajam の前で軍隊の長となり、
 天空の上でその神聖な魂は高められ、
 その通り、彼は8000人の兵士にも長となり、
 最後の審判の場でその頭に苦痛が生じた。

Khān のような聖人は、どこに？⁶¹⁾

このアブドゥル・カリーム・ベグについては、ホージャ・ムハンマド・シャリーフ Khwaja Muḥammad Sharīf の記述に、ブルハーン・アッディーン・ホージャが黒山派ホージャたちの勢力を打倒し、ヤルカンドで政權の座に就いた際に、クチャのハーキムに任命され、その後清軍とクチャで9ヶ月間戦ったとされる Taghlīq ‘Abd Karīm Beg という人物に関する言及があり⁶²⁾、おそらく同一人と考えられる。清朝史料にも、クチャで清軍に對抗した阿布都克勒木(‘Abd Karīm)に関する記事が見られる⁶³⁾。また、『欽定平定準噶爾方略』によれば、阿布都克勒木は、ブルハーン・アッディーン・ホージャが清軍に敗北してカシュガルを放棄し、バダフシャン方面に逃走した後、阿勒楚爾という場所で清軍との戦闘の中、1759年7月30日に戦死したと言われる⁶⁴⁾。要するに、他史料から推定されることとして、アブドゥル・カリーム・ベグはブルハーン・アッディーン・ホージャに属する有力者のうちの一人であり、清軍との戦闘の中で死亡した人物ということになる。したがって、この人物が Prov.219 の「タズキラ」において、殉教者として賞賛されていることは、事實関係に沿ったものであると言えるであろう。

他方、逆に、ブルハーン・アッディーン・ホージャを迫害したムスリムに関しては、彼らを強く非難する内容が相當量含まれている。

まず、バダフシャン人に對する執拗とも言える非難の言辭を挙げることで

61) Prov.219, C のセクション15。

62) ウズベキスタン科學アカデミー東洋學研究所所藏寫本, Рукопись 10191, ff.401r-401v. 當該寫本は、『ターリーヒ・ラシーディー *Tarikh-i rashīdī*』のトルコ語譯に、その後の時代の歴史的狀況に関する敘述を譯者であるホージャ・ムハンマド・シャリーフが付加する、という獨特の形態をとっている。

63) 佐口透前掲書, pp. 52, 54. また、中國第一歷史檔案館編『乾隆朝上諭檔』第3冊, 檔案出版社, 1991年, pp. 249-50 も參照。

64) 『欽定平定準噶爾方略』, 卷77, p. 5v; 卷80, p. 33v-34r.

きる。

(1) Makhdūm-i A'zam 閣下に苦痛を與えたもの、それは Badakhshān の民である。宗教 (dīn) を異教徒に譲り渡したのも、それは Badakhshān の民である。變節したのも、それは Badakhshān の民である。Shimr の呪われたる奴隸、それは Badakhshān の民である。預言者たちと聖者たちが憎むもの、それは Badakhshān の民である。Khān Khwajam のような聖人は、どこに？

(2) [Khān Khwajam は] 賣るためにファトワーを書いた、Badakhshān の民を。聖法 (shar'ī) で賣ることは合法である、Badakhshān の民を。イスラーム教徒と言うなかれ、Badakhshān の民を。奴隸とすることは合法である、Badakhshān の民を。

(3) 道を同じくするな、どんな Badakhshān の民とも。その隣に座るな、どんな Badakhshān の民とも。一緒に食事をするな、どんな Badakhshān の民とも。言葉を交わすな、どんな Badakhshān の民とも。良いことをするな、どんな Badakhshān の民にも。

とあり⁹³、バダフシャン人を強く弾劾する、感情的な憎悪を露わにした表現がいささか過度に繰り返されている。このような敘述様式は、清軍との戦闘における敗北後、逃亡先のバダフシャンで亡くなったブルハーン・アッディーン・ホージャの死をめぐる事情と、関わりがあると考えられる。本タズキラにおいては、ブルハーン・アッディーン・ホージャの死に關して、

(1) Khān Khwajam は異教徒とおこなった、Badakhshān で戦いを。あの Badakhshān の平原で異教徒たちはおこなった、警戒を。神 (Ḥadrat Tengri ta'ālā) はお命じになった、戦いを。[Khwajamは] 馬を戦場に放ち、異教徒たちを掃討した。この Badakhshān の使者を威壓するならば、よいであろう。

(2) Khān Khwajam はなった、Badakhshān で殉教者と。この世、あの世で彼は幸いである。「その場で殺せ」との言葉に従い、彼は異教徒を脅迫

⁹³ (1) Prov. 219, C のセクション 25; (2) Prov. 219, C のセクション 26-27; (3) Prov. 219, C のセクション 29。

した。宗教より逃れたるものは邪惡である。不運が Khān Khwājam を見舞った、羊の年に殉教者となった。アシル月の10日であった、Khān Khwājam は殉教者となった。御年35であった、Khān Khwājam は殉教者となった。

とあり³⁶、その死を直接的にバダフシャン人に結びつけているわけではない。しかし、その真相は必ずしも確定的なものではないにせよ、主に清朝史料に基づく佐口透の研究によれば、ほかならぬバダフシャンの君主であったスルターン・シャー Sulṭān Shāh が、ブルハーン・アッディーン・ホージャの殺害に直接的に關與していたとされるのである。ブルハーン・アッディーン・ホージャは、カシュガル方面における清軍との戦闘に敗北した後、バダフシャン方面に逃走し、途中で清軍の追撃を受けながらもバダフシャンに到達した。しかしホージャたちは、スルターン・シャーによって逮捕されて監禁状態に置かれ、スルターン・シャーの部下たちの手によって非業の最期をとげたという³⁷。すなわち、ブルハーン・アッディーン・ホージャが同じムスリムであるバダフシャンの君主の命令によって殺害されたとすれば、本タズキラがバダフシャン人に對する敵意を露わにしているのも不思議ではない。

バダフシャン人以外では、ヤンギ・ヒサルルのハーキムであるスルターン・ガルチャ Sulṭān Ghalcha という人物に對する、「異教徒・キリスト教徒より惡辣」という非難を見いだせる。

Yengi Hīṣār のハーキムは Namrūd, Faryoun より惡辣。その名は Sulṭān Ghalcha, キリスト教徒, 異教徒より惡辣。一年と半, 命をすり減らし過ぎた。この異教徒は, その時代に. Khān Khwājam の命にこの者は惡意ある保證人であった, その時代。すべての異教徒より惡辣, Sulṭān の惡意ある呪いは。いかなる異教徒も不可能であろう, Sulṭān 以上の惡辣非道は。³⁸

この人物を非難の對象とする根據として表明された具體的な情報について、

³⁶ (1) Prov. 219, C のセクション17; (2) Prov. 219, C のセクション18-19。

³⁷ 佐口透前掲書, pp. 70-73。

³⁸ Prov. 219, C のセクション29-30。

「Khān Khwajam の命に悪意ある保証人」という以外、本寫本自體には含まれていない。しかし、ヤング・ヒサールのハーキムとされていることから判断すれば、この人物については、ムハンマド・シャリーフの記述に登場するスルターン・ベグという人物と同一人と考えられ、その事績がいくらか明らかになる。すなわち、ブルハーン・アッディーン・ホージャが清軍に敗北し、カシュガルからバダフシャン方面に逃走した後の段階における記述として、

Yengi Hışar に Sultān Beg をハーキムとした。それから Khaqān-i Chīn (チーンのハーカーン) の軍隊は, Sayyid Burhan al-Dīn Khwāja と Khwāja Jahān Khwāja たちの後ろから2方向で騎馬により進んだ。あるグループは Andijan の方向に進軍した。あるグループは, Badakhshan の方に進んだ。そのとき, Sayyid Burhan al-Dīn Khwāja は, Badakhshan 道にある Yashıl Kul という場所に到着していた。この(チーンのハーカーンの)軍隊も, その場所に行った。兩隊列は相對し, 多くの戦闘を交えた。Yengi Hışar にハーキムとなった Sultān Beg は, 大變有能な人物であった。40人近い人を連れて, Badakhshan に入り, そのときの王 (tura) である Sultān Shah に會った。いくらかの言葉を Sultān Shah に明らかにし, 説明した。これらの言葉を聞いて, Sultān Shah に恐怖が生じた。そのとき, 麾下の兵隊たちを率いて, Sultān Beg と進んで, Sayyid Burhan al-Dīn Khwāja たちの行く手を遮った。こちらからはチーンのハーカーンの軍隊が勝利して戦った。ついに, 災厄の指が彼らの襟をつかまえた。.....Sayyid Burhan al-Dīn Khwāja と Khwāja Jahān Khwāja たちはどんな方向にも行く術を失った。ついに, 彼らを捕らえ, 1173年サファル月23日 (1759.10.16) に Sayyid Burhan al-Dīn Khwāja と Khwāja Jahān Khwāja たちの若木の命をこの世の園から亡き者とした。

とあり⁶⁹, このスルターン・ベグが, スルターン・シャーにブルハーン・アッディーン・ホージャの逃走に関する情報を通報し, 死へと導くのに一定の役割

⁶⁹ Рукопись 10191, ff.401v-402r.

を演じた人物とされている⁴⁰⁾。たしかに、スルターン・シャーと清軍の挾撃を受けて行き場を失い、捕らえられたというこの記述は、ブルハーン・アッディーン・ホージャらがいったんはバダフシャンに進入した後、スルターン・シャーに捕らえられ、殺害されたとする清朝側史料⁴¹⁾と、若干の齟齬をきたしているようにも思われる。しかし、カシュガルの著者が19世紀中葉にこのような敘述を残しているということは、スルターン・ベグがブルハーン・アッディーン・ホージャの死に関わっているという逸話がカシュガルにおいて人々の間で伝えられていたことを示唆している。Prov.219 寫本において、當タズキラの著者もやはりそのような事實認識を共有しており、その認識を基礎として「スルターン・ガルチャ」に對する強い非難を浴びせる敘述を展開したのではないだろうか。

このように、本タズキラは、ブルハーン・アッディーン・ホージャを攻撃し、最終的に敗走させた清朝軍という異教徒「カーフィル」だけでなく、ムスリムでありながらブルハーン・アッディーン・ホージャの死に関與したとされる人々を強く弾劾する、という姿勢が顯著である。

もう一つ、表現上の傾向性として注目すべきことは、以上の登場人物の敘述様態における特徴として、特定の表現が繰り返し用いられることを通じて、特定の宗教的な立場に基づいた價值判斷の表明、行動規範の尊重を勧める内容を含んでいるということである。とくに、このようなメッセージ性の表出において、前に假定形の從屬節(～sa)をともなった「khobmikin」(もし～すれば)よいであろう」という表現の反復による獨特の文體が効果を擧げているように思われる⁴²⁾。例として次に掲げると、

40) 『欽定平定準噶爾方略』卷79, 17頁裏, 富德等奏に、ブルハーン・アッディーン・ホージャのバダフシャンへの逃走後に清朝側が事情を探らせるために派遣した「回人伯克(ムスリムのベグ)素勒坦和卓 Sulṭān Khwaja」という人物が現れるが、スルターン・ベグを指す可能性もある。

41) ブルハーン・アッディーン・ホージャの死の事情については、清朝史料も含め、佐口透前掲書, pp. 67-80.; Ходжаев, *op.cit.*, c.91-97 で詳細に検討されている。

42) この表現は、他の文學作品においても用いられている。たとえば、18～19世紀ホタンの詩人ガイラト作の詩には、この表現のリフレインを含む五行詩の存在が知られている。李國香『維吾爾文學史』, 蘭州大學出版社, 1992年, pp. 249-250 を參照。

- (1) Khwajam が到る所でイスラームを爲し, Yarkand に向かわれるならば, よいであろう!
- (2) もし私たちがイスラームの道に入るならば, よいであろう!
- (3) もし Khān Khwajam が異教徒を殺すならば, よいであろう!
- (4) もし私たちが [Khān Khwajam の] 宗派にあるならば, よいであろう!
- (5) もし私たちがケバーブを鹽とともに Khwajam に捧げるならば, よいであろう!
- (6) もし私たちが Chīn Khaqān (チーンのハーカーン) の軍隊を威壓するならば, よいであろう!
- (7) もし私たちが [Khān Khwajam の] 仁慈・祝福の下に座を占めるのであれば, よいであろう!
- (8) もし私たちが Khān Khwajam のような人を最後の審判で見るならば, よいであろう!
- (9) もし私たちがその [Khān Khwajam の] 下僕として命を捧げるならば, よいであろう!

とあり⁴³, ここで著者は, イスラーム信仰の尊重, 異教徒の殲滅, ホージャに對する従屬, などをプラスの価値をもつ行爲として強調している。たしかに人稱は「我々」となっている文が多いが, むしろ執筆者によるこのような主張を讀者に對してアピールする, すなわち讀者に對しても同様の価値意識をもつよう要請する, という側面が強いと考えられる。

(5) 史料としての特徴

以上より, 『ハーン・ホージャムのタズキラ』の部分を獨立した著作としてとらえるとき, 清朝による東トルキスタン征服という重大事件が発生した時期において, 事態に直接關與したムスリム側の最高指導者ブルハーン・アッデ

⁴³ (1)Prov.219, C のセクション7; (2)Prov.219, C のセクション7; (3)Prov.219, C のセクション9; (4)Prov.219, C のセクション9; (5)Prov.219, C のセクション10; (6)Prov.219, C のセクション10; (7)Prov.219, C のセクション11; (8)Prov.219, C のセクション11; (9)Prov.219, C のセクション17。

イー・ホージャの政權掌握、清朝との戦い、および死について、ムスリム側から記述した現存する希少な史料のうちの一つであると評価することができる。その歴史史料としての特徴に関しては、以下の2点を指摘できよう。

第一に、当時の諸事件に關して實際の事實關係をかなりの程度反映した敘述を實現していることが、他史料との照合により檢證できるということが挙げられる。また、寓話的要素の混入は否定できないものの、基本的に神祕的な奇跡譚などを含んでいない。

第二に、トルコ系ムスリムである執筆者の立場、事件・人物に對する認識が明確に打ち出されていることが挙げられる。確かにこの點において、歴史敘述という面から言えば強いバイアスを帯びていることは間違いない。しかし、東トルキスタンのムスリムがおそらくは清朝統治下のある時期にムスリムとして抱いていたメンタリティ、歴史に對する認識などを窺うための貴重な材料として、その史料的价值は低くないと考えられる。とくに、清朝の統治下において、カシュガル・ホージャ家アーファーク統のホージャを、歴史上の重要な事件の具體性に依據しつつ、血統に基づく「神聖性」だけでなく、清朝に對する「聖戰」の遂行という實踐的行爲において殊更稱揚するという點において、「聖者」の奇跡譚などを主モチーフとするそれ以前のタズキラ⁽⁴⁴⁾とは、内容的に一線を畫していると言って間違いない。まさにこの點において、清朝による東トルキスタン征服後の段階におけるカシュガル・ホージャ家の宗教的權威の性格やその根拠を考える上でも、無視できない内容を含んでいると言えるであろう。

3 寫本全體の性格について

全體の基本的な構成の検討、第3部分のタズキラに關する考察、これらを踏まえた上で、本寫本全體が果たして一體何なのか、その史料としての性格について、憶測を交えながらいくらか推定を試みたい。

(44) たとえば *Tadhkira-i Sayyid Āfaq Khwājam*, Lunds Universitetsbiblioteket, Handskriftsavt, Prov.22; *Tadhkira-i Khwāja Muḥammad Sharīf*, Bibliothèque de l'Institut de France, Mss.3355-3; *Tadhkirat al-irshād*, Bibliothèque Nationale de France, Suppl. turc, 1006. など。

本寫本の性格を考える上で第一に直面する重大な問題は、内容的に大きく3つ(A, B, C)に分かれる部分と全體との関係である。換言すれば、この性格・形態を異にする3部分がたまたま同一紙面上に記されたのか、それとも何らかの意圖でもってこれら3部分を配置して一つの寫本としたのか、ということである。まず、形態的な側面から見ると、本寫本は物理的には10枚の紙を張り合わせて作られているが、紙の接着部と内容面における区分はまったく一致しない。文字等はまったく切れ目なく紙の表面を覆っており、紙を張り合わせた後に書かれたものであることは明らかである。

第1部分(A)と第2部分(B)については、少なくとも外見的には一續きに記されている。すなわち、兩部分の境目においてまったく切れ目なく文字が綴られている。もちろん別々の内容のものをたまたま一續きのものとして寫してしまったという可能性も否定しきれないが、別の種類のものがまったく一續きに記されている以上、何らかの意圖の下に二つのパーツを連續的に記した、と考えた方が合理的であろう。

他方、第2部分(B)と第3部分(C)については、文字としては繋がっていないため、その点からのみ言くと、第3部分(C)が恣意的に第2部分(B)の後ろに接着させられたという可能性もある。ただ、兩者の内容を吟味してみると、第2部分(B)に挿入された殉教者アブドゥル・カリーム・ベグに関する韻文(nazm)⁴⁵とタズキラの一節には高い類似性を示す部分がある。すなわち、内容面で第2部分(B)と第3部分(C)は明確な關連性がある。このことから、第2部分(B)が記された当初から何らかの意圖性をもって第3部分(C)をその後に配置したと性急に斷定してしまうことはできないが、その蓋然性は高いと思われる。さらに、いまだ印象の段階にしか過ぎないが、筆跡から見ると、第1・第2・第3部分を通して、同一人物の手になるものであると想像される。したがって、本寫本は全體として一續きのものとして作成された可能性が高いと言える。

たしかに、本寫本が全體として一續きのものとして、同一人の手によって筆寫されたものであったとしても、必ずしもこれが3つのパーツからなる一體化された「著作」ないしは「ドキュメント」として存在したということを完全に

⁴⁵ Prov.219, B(1)の圖24-29。

證據だてるものではない。しかし、3つの主要部分がそれぞれの位置に體系的に配置されることを通じて、ある特定の目的に沿って作成されたものである、という可能性を考えてもあながち的外れとは言えないであろう。

このような假定の上に立つとき、本寫本は全體としてどのような性格を示しているであろうか。

まず、先頭に配置されている以上、(A)「ファトワー」部分に重點が置かれていることは間違いない。その内容は、一言で表現するならば、「ムハンマドの子孫を無條件に尊重し、服従せよ」ということである。これらが現實に東トルキスタンの特定の地域で發せられた「ファトワー」であるとするならば、具體的にはどのような状況が想定され得るであろうか。短絡的な假定であるとはいえ、これが發せられたまさにそのときに、ムハンマドの子孫と稱せられる生身の人間、すなわちカシュガル・ホージャ家の人物がそこに現存し、その人物（たち）に對する尊重と服従を要求する必要性があった、という實際的なシチュエーションが考えられるのではなからうか。

第2部分の(B)『ハーン・ホージャムの系譜の書』は、前述のようにムハンマドに始まり、マフドゥーミ・アーザムを経て、19世紀の東トルキスタン史上に實在し、活動した記録が残っているカシュガル・ホージャ家のメンバーたちを後尾に掲載している。この内容が「ファトワー」の内容とリンクするもののだとして、なおかつ「ファトワー」が現存するムハンマドの子孫に對する服従を要請するものだとするならば、そのムハンマドの子孫というのは、この『系譜の書』上のおそらくは時代的に最も新しく最後尾に示されているカシュガル・ホージャ家のメンバーを指している可能性がある。換言すれば、「ファトワー」において尊重の對象として指定された現存する「ムハンマドの子孫」と稱されている人物、すなわちカシュガル・ホージャ家の人物が、たしかにムハンマドの子孫であり、マフドゥーミ・アーザムの子孫であるということを、この第2部分(B)は明示してみせる役割を擔っていると考えられる。そしてこの系譜において最後尾に記されているホージャは、ブズルグ・ハーン・トゥラ Buzurg Khān Tūra, チョン・ハーン・トゥラム Chong Khān Tūram, キチク・ハーン・トゥラ Kichik Khān Tūra, ムハンマド・イーミーン・ハーン・トゥラ

Muḥammad Īmīn Khān Tūra などのホージャであり、彼らは歴史上いわゆる「ハフト・ホージャガーン」（7人のホージャたち）と呼ばれている人々であると考えられる⁴⁶。

最後に配置された第3部分(C)『ハーン・ホージャムのタズキラ』は、少なくとも(B)『ハーン・ホージャムの系譜の書』の最後尾に記されたホージャたちが歴史舞臺に登場してきた時期（すなわち19世紀）よりもはるか以前の18世紀なかに活動したホージャに関するものである。同部分の性格として、元來本寫本とはまったく別個に獨立した著作として存在したものが本寫本編集段階でそのまま流用された、あるいは一部變改されて組み込まれた、また、残されていた斷片的な傳承などを参照しつつ本寫本のために獨自に書き下ろされたものが組み込まれた、といった様々な可能性が考えられる。しかし、同部分が本寫本成立以前の段階ですでに獨立した自己完結的な著作として存在した場合であっても、本寫本が全體としてある特定の目的から作成されたものであるとするならば、少なくともこのタズキラにおける内容の傾向性、重點的に提示されているメッセージ性は、本寫本の全體的な構成の中で固有の役割を與えられており、寫本全體が作成された意圖に沿うものであると想像される。

ここで、當タズキラが、第2章で検討したように、内容面においてブルハーン・アッディーン・ホージャという特定のカシュガル・ホージャ家の人物を、イスラーム聖者として異教徒と戦ったことをもって稱讃する、また、このように偉大な聖者に付き従い、とくにそのために殉教したベグラムスリム住民を讃える、さらに、ホージャに敵對したムスリムを非難する、という特徴を具えていることに注目しなければならない。このような敘述の傾向性は、少なくとも過去の歴史上に實在したカシュガル・ホージャ家の「聖者」が「聖戰」を遂行する際にその活動に殉じたムスリムを、歴史事實に即する形で稱揚しているという点において、現存する特定のホージャの尊重とそれへの服従を要求する主張を提示していると思われる第1部分の「ファトワー」および第2部分の『ハーン・ホージャムの系譜の書』を、補完するものであると言えよう。この

⁴⁶ このホージャたちの活動については、加藤直人「『七人のホージャたち』の聖戰」『史學雜誌』86編1號、1977年、pp. 60-72、を参照。

ように考えると、本寫本が3部分の結合體として、すぐれて體系的な構成をとっていることがわかるであろう。

他方、「ファトワー」の内容が「ジハード」(聖戰)を要求するものではない、ということにも注意を拂う必要がある。たしかに、第3部分が第1・2部分との関連性においてセッティングされているとするならば、ブルハーン・アッディーン・ホージャという以前の重大な歴史的な事件における「聖者」の事績が、現存するホージャをめぐる寫本作成時點における類似の状況に投影される形で、アナロジックに配置されている可能性がある。すなわち、第3部分『ハーン・ホージャムのタズキラ』の内容からは、「異教徒」もしくはホージャに對立するムスリムに對する對抗ということが目前の課題として設定されるような状況が想像される。しかしながら、本寫本は直接的に「聖戰」のために作成されたものであるとは言い難いのである。

以上の點より、本寫本の作成に明確な實際上の目的が存在したとして、作成された事情がどのようなものであったかを推測するならば、ホージャが現存する条件下で、「聖戰」もしくは敵對者との戦いというものを経験したのは視野に置きつつも、當時點におけるホージャに對する服従を確かなものとする、あるいは、より多數のムスリムをホージャへの追從者として確保する、といった意圖の下に、そのホージャの支持者たちによって作成された、と推量するのが妥當であろうと思われる。タズキラ部分における、過去の歴史上のホージャに忠實なベグたちへの賞賛、敵對したムスリムへの強い非難は、このような意圖と對應するものではなかろうか。ちなみに、押された印章が30個にも及ぶ以上、それらがすべて偽造物を使用したものである、ということでない限り、本寫本は數十名の人々の確認を受けていたことになる。このことは、本寫本にまつわる政治的な活動に、一團の人々が關與していたことを示唆している。

それでは、そのような事情が生じたことを、具體的には歴史上どのような時點に想定することができるだろうか。ジャハーンギール・ホージャの侵入と清朝による鎮壓という事件以後、また、印章にあるヒジュラ暦1258年(西暦1842/43年)以後にカシュガル・ホージャ家のメンバーが東トルキスタン地域に姿を現し、何らかの政治的な活動を展開しようとした局面ということになるなら

ば、一つは、1847年の「七人のホージャたち」の亂がある。コーカンド・ハーン國領からカシュガル方面に進入したこれらのカシュガル・ホージャ家のホージャたちは、本寫本第2部分の『ハーン・ホージャムの系譜の書』の末尾に記されているブズルグ・ハーン、ムハンマド・イーミン・ハーン、キチク・ハーンらのホージャらを含んでいる。もう一つの可能性としては、1864年に勃發したムスリム反亂の中で、これらのホージャたちがまた進入するという状況が生じた⁴⁷⁾。とりあえず現在のところは、これら2つの状況を推測できる時點として指摘しておこう。

もちろん、寫本全體の性格に關するこのような議論は、現段階ではあくまで憶測を重ねた結果得られた一つの假説の提示にしか過ぎない。しかし、本寫本が全體として、執筆當時現存したカシュガル・ホージャ家アーファーク統に屬する特定のホージャの活動に直接關與した人々の手により、歴史上の具體的な場面において、何らかの政治的な意圖のもとに、實際に使用されるために作成され、そして實際に使用された、という可能性を考えてみることにまったく意味がないとは言えないであろう。

お わ り に

19世紀に成立したと考えられる本寫本は、大きくは、ムハンマドの子孫の尊重を求める「ファトワー」、カシュガル・ホージャ家のホージャたちへと繋がる『ハーン・ホージャムの系譜の書』、そして『ハーン・ホージャムのタズキラ』、という3部分から構成されている。第3部分は、18世紀なかば、中國の一部という東トルキスタンの地域的枠組みが成立した決定的な歴史的轉換點の時期における當地域の状況について、トルコ系ムスリム住民の手によって描寫された希少な史料として、獨自の價值をもっている。また、寫本全體としては、これら3部分の體系的な結合體として、19世紀のカシュガル・ホージャ家アーファーク統による特定の政治的活動に關わるドキュメントであると考えても矛盾はないと考えられる。このように、本寫本は、第3部分の『ハーン・ホー

⁴⁷⁾ 新免康「ヤークープ・ベグ政權の性格に關する一考察」『史學雜誌』96編4號、1987年、pp. 3-6、を參照。

ヤムのタズキラ』および全體という2つの面から、18・19世紀におけるカシュガル・ホージャ家の活動の特徴的な断面を直接的に反映するものであろう。

他方、視点を變えて本寫本を眺めてみるならば、當時の東トルキスタンにおけるムスリム住民の精神世界・イスラーム信仰體系のありかたが形象化された内實をもつと考えられる。その具体的な様相に関する本格的な検討は、別の機会に譲りたい。

of exceptions to the general principle of the need for a shaykh. Yu Hao-zhou 余浩洲 placed the attainment of knowledge as the first of the *maqāmāt*, stations of spiritual training, in his arrangement of the various virtues of the *Mirṣād* and *Maqṣad*. In expounding its importance, Ma Zhu 馬注 also explicated the process of spiritual purification based on the *Mirṣād*, but took the attainment of knowledge as the standard method of spiritual purification on the basis of some unspecified scripture. These attitudes that emphasized knowledge were contrary to view expressed in the *Mirṣād*, but they agreed with requirement of the attainment of knowledge advocated by the A-hong 阿訇, who were the teachers closest to the authors and readers of Islamic literature in Chinese, and who solely taught interpretative reading of Arabic and Persian texts without instructing their students in spiritual training. It may be claimed that in Yu's device of creating one's own *maqāmāt* suitable to an individual's own environment was a sort of sinification. Although Wang, Ma, Yu, and later Liu Zhi 劉智, failed to address the rule of the *Mirṣād* that had set the *silṣila*, spiritual chain stretching back to Muḥammad, as a precondition for a being shaykh, but, in this may be seen as their intention of opening the qualification of shaykh to the A-hong, who lacked the *silṣila*.

**EVIDENCE OF THE ACTIVITIES OF THE ĀFĀQĪYA IN
EASTERN TURKESTAN: ON MANUSCRIPT PROV. 219
OF THE GUNNAR JARRING COLLECTION,
LUND UNIVERSITY LIBRARY, SWEDEN**

SHINMEN Yasushi and SUGAWARA Jun

In the history of Eastern Turkestan of the seventeenth through nineteenth centuries, the family known as the *Kāshghar Khwāja* consistently played an important role in the political activities of Turkic Muslims. It would be difficult to claim that a sufficient number of historical materials exist to recount their circumstances in detail. In this study, we have focused on a scroll that has been registered with the designation Prov. 219 in what is known as the Jarring Collection of the Lund University Library in Sweden.

This manuscript consists of three parts: (A) a *fatwā*, a religious order; (B) a *nesb name*, a lineage, of Khān Khwājā; and (C) the *tadhkira*, legend, of Khān Khwājā. The first part, the fatwa, persistently advocates unconditional obedience to the descendants of the saint by citing a bogus *Hadīth*.

The second part of the scroll, section B, is basically a lineage of the *Āfāqīya* branch of Kāshghar Khwāja family that includes the names of both a large number of legendary saints and historical members of the *Āfāqīya* Khwajas up to the 19th century.

The third part of the scroll, section C, mainly describes activities of Burhān al-Dīn Khwāja, who resisted the Qing dynasty's conquest of Eastern Turkistan in the middle of the 18th century. It is uniquely valuable as a rare material of Turkic Muslim on important incident at that time.

It is possible to say that a group who supported a Khwaja leader, who was alive at the time of its compilation, compiled this entire manuscript in the 19th century for political purposes. In short, this manuscript directly reflects characteristic aspects of political activities of the *Āfāqīya* branch of the Kāshghar Khwāja family in the 18th and 19th centuries.